

Title	慶應義塾図書館蔵『きわう』 解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1999
Jtitle	三田國文 No.30 (1999. 9) ,p.72- 79
JaLC DOI	10.14991/002.19990900-0072
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19990900-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『きわう』解題・翻刻

石川 透

解題

ここに紹介する慶應義塾図書館蔵『きわう』は、室町物語「祇王」として知られている作品である。松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』、一九八二年八月)によれば、「元和寛永」刊古活字版以外に四部の奈良絵本・絵巻が著録されているが、それ以外にも伝本は現存している。

慶應義塾図書館本は、他の奈良絵本と同じく、古活字版の系統に属す。本文的には古活字版に近いが、小異があり、さらに、挿絵の数は、本来の形ならば慶應義塾図書館本の方が一図多かったようである。

室町物語『祇王』は、『平家物語』巻第一「祇王」を中心に利用して成立した作品である。既に『日本古典文学大辞典』第二巻(一九八四年一月)「祇王」の項等に指摘されているように、慶應義塾図書館本を含む古活字版の系統は、八坂流中院本『平家物語』に最も近い。

本書の書誌は、以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館

番号、一一〇X―四〇九―二

形態、横型奈良絵本、袋綴、二冊

時代、「江戸初期」写

寸法、縦一八・五糎、横二五・七糎

表紙、打曇り表紙

外題、表紙中央に朱色題簽、「きわう 上(下)」と墨書

内題、ナシ

料紙、斐紙

行数、半葉一五行

字高、約一四・〇糎

丁数、墨付、上一一丁、下九丁

挿絵、上五図(内、一図欠)、下四図(すべて一頁分)

奥書、ナシ

印記、第一丁表に朱印「幸田成友」「慶應義塾図書館蔵」
翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」・『』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜

をはかつたが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかつた。

きわう 上（題簽）

むかしより、けんへいりやうか、てうかにめしつかはれて、わうくわにしたがはず、てうけんをかるむする物あれば、たかひにいましめをくはへしかは、世のみたれもなかりしに、ほうげんに、ためよしきられ、へいちに、よしともうたれしかば、すゑくゝのげんじありといへとも、あるひはなかさされ、あるひはちうせられ、いまは、へいけの一るひのみはんしやうして、いかならんすゑの世までも、なに事かあらんとみえし。

にうだう、かやうに、てんかを、たなこゝろのうち、にきりたまひしかば、世のそしりをもはゞからず、人のあさけりをもかへりみず、ふしきの事をのみしたまひけり。

たとへは、そのころ、みやこにきこへたるしらひやうし、ぎわう、ぎによとて、おとゝいあり。とちと申しらひやうしのむすめなり。

中にも、にうたう、あねのきわうをてうあひして、にし八てうのしゆくしよに、とりすへてぞをかれける。はゝのどぢをも、大しの物にしたまひて、よき屋つくりてとらせ、まい月、百石百くわん、をくられければ、いゑのうち、ふつきして、ゆたかなる事かきりなし。

〔挿絵・第一図〕

かゝりければ、いもうとのきによをも、人をくしてもてなしけり。京中のしらひやうし、きわうかさいはひをうらやむ物もあり、そね物もおほかりけり。

うらやむ物は、「あなめてたのきわうこせんのさいはひや。おなしあそひ物とならば、かくこそはあらまほしけれ。あはれ、これは、きといふもじをなにつきて、かくはめてたきやらん。いさや、われらもつきてみん」とて、あるひは、ぎ一とつくもあり。あるひは、ぎ二とつくもあり。ぎとく、ぎしゆ、ぎふく、ぎほうなどゝつく物もありけり。

そねむ物は、「なんてう、なにより、もじによるへき。さいはひは、せんせのしゆくしう、むまれつきにてこそあらんなれ」とて、ぎといふもじをつかぬ物もありけり。

そもくゝ、わかつてうに、しらひやうしのはしまりける事は、とはのゐんるとき、しまのせんさい、わかまへとて、二人かまいはしめけるとかや。はしめは、すいかんにたてゑほし、さやまきをさしてまひければ、おとこまいとそ申ける。中ころはより、ゑほしをのけて、しろきすいかんはかりにてまひければ、しらひやうしとはなづけられたり。

きわう、かくとりすへられたてまつりて、みとせと申し春のころ、ほとけこせんと申しらひやうし、いてきたり。かくのくにの物なり。「むかしより、おほくのあそひ物ありつれとも、こほと物の物こそ、いまたなけれ」とて、京中の上下、こそりてこれをもてなしける。

あるとき、ほとけこせん、おもひけるは、「われ、京中にかくれなしといへとも、たうじときめき給ふ、大しやうのにうだう殿に、いまゝて、めされもせぬこそほいなけれ。あそひものゝすいさんは、何かくるしかるへき」とおもひければ、あるとき、きつしや、じんじやうにて、にし八てうへそまいたる。

人まいりて、「ほとけと申しらひやうしのまいりて候」と申ければ、にうだう、「なんでう、さやうのあそひ物といふは、人のめしにつきてこそまいる事なれ、めさぬに皆さん、しかるへからず。神ともいへ、ほとけともいへ、きわうがあらんところへはかなふまし。とく、まかりいてよ」とありければ、ほとけこそん、すげなきおほせをかうふりて、くるまにのりてそいでにける。

〔挿絵・第二図〕

きわうこそん、申けるは、「あそひ物のすいさんは、つねの事にてこそさふらへ。これは、としも、いまたおさなきとうけたまはりさふらふ。たま／＼おもひたちてまいりてさふらうに、すげなきおほせをかうふりて、いかばかり、はつかしうも、かたはらいたくもさふらうらん。わか身もたてしみちなれば、人のうへともおほえず。たとひ、まひを御らんし、こゑをきこしめされずとも、御たいめんありて、かへさせおはしましたらんは、ありかたき御なさけてこそ」と申ければ、にうだう、「さらはめせ」とて、よはせらる。

ほとけこそん、すげなふいはれて、はる／＼いてたりけるを、めし返し、にうだう、たいめんしたまひて、「けふのけんさんは、いかに、あるまじかりつるを、きわうか何とおもひてやらん、しきりに申つるあひた、めしたるなり。かやうにたいめんしたらんに、こゑをきかさんむねなり。いまやう一うたへかし」とのたまふ。

ほとけこそん、うけたまはりて、いまやうをそうたひける。「きみをはしめてみるときは、ちよもへぬへし。ひめこまつ、

御まへのいけなるかめをか、つるこそむれゐてあそふめれ」と、二三へん、うたいすましたりければ、みな人、かんしあはれけり。

にうたうも、おもしろけにおもひたまひて、「わこそんは、いまやうは、上ずにてありけるや。いまやうがよければ、まひも、さためてよかるらん。何事にて、一ばんみはや。つゞみうちめせ」とて、めして、一ばんまはせらる。

をよそ、此しらびやうし、としは十六七なり。みめかたちならひなく、かみのかゝり、まひのすかた、こゑよく、ふしも上すなれば、いかゞは、まひもそんすへき。心もよはずぞまつたりける。けんもんの人々は、じぼくをおとろかさずといふ事なし。

にうたう、まひにや、めてたまひけん、ほとけに心をうつされける。てんせい、此にうたう殿は、いら／＼しき人にておはしければ、まひのはつるをも、をそしとやおもはれけん、はしめのわかをばうたはせ、せめうたを、いまたいひもはてざるに、ほとけをいたきて入たまふ。

〔挿絵・第三図〕

ほとけこそん、「こは、なに事さぶらふそや。わらは、すいさんの物とて、すげなきおほせをうけたまはりて、まかりいてさふらひつるを、きわうごぜんの申されてこそ、めされてまいりて候へ。きわうこそんの、心のうちこそはつかしけれ。たゞ、いとまたまはりて、まかりいてん」と申ければ、にうたう、「いや／＼、すべてくるしかるまし。ともかくも、たゞ、じやうかいがまゝそとよ。たゞし、きわうかあるをはゝかるか。さ

らは、きわうをこそいたさめ」とあれは、ほとけこせん、「それ又、いよ／＼心うくさふらひなん。もろともに、めしをかれまいらせんだに、はつかしうも、かたはらいたうもさふらうへし。まして、きわうこせんを、いたさせおはしまさん事、いかてか、さるうき事さふらうへき。まことに、のちまでも、わすれぬ御事ならば、又こそまいりさふらはめ。けふはた、いとまをたひて、いたさせたまへ」と申けれども、にうたう、せひとも、きゝいれたまはず。

『きわう、いそぎまかりいてよ』との御つかひ、しきなみなりけるうへは、しほしもやすらふへきにもあらず」とて、すむかたのちり、ひろはせ、はきのごひ、みくるしき物など、とりしたゝめて、すてに、いづへきにごそなりにけれ。

日ころより、かゝるへしとおもひまふけにし事なれとも、さすがに、きのふけふとおもはず。此みとせかあひた、すみなれしところを、いまをかぎりたちいつれは、なこりもおしく、かなしくて、かひなきなみたぞこほれける。

きわう、さるにつけても、たちかへり、しやうじにかくそかきつけける。

もえいつるもかるゝもおなしのへのくさ

いつれか秋にあはてはつへき

さてしも、あるへき事ならねは、すてに、くるまにのらんとしけるか、

いつちともいつへきかたもおほえぬに

なにとなみたのさきにたつらん

きわう、しゆくしよにかへりつゝ、しやうじのうちにもろひ

ふし、なくよりほかの事ぞなき。はゝ、これをあやしみて、「いかに／＼」とひけれとも、返事をするによはず、くしたる女にたつねてぞ、さる事ありとはしりてける。

さるほとに、まい月をくられける、百石百くわんをも、とめられて、いまは、ほとけこせんの、ゆかりの物ともぞ、はしめてたのしみさかへける。

京中の上下、「きわうこそ、にし八てうより、いとまたまはりて、いてたるなれ。いさや、けんさんしてあそはん」とて、あひは文をやる人もあり、ししやをつかはすかたもあり。

きわう、「されは、いまさら、たちかへり、人にあそひたはふるへきにあらず」とて、文をとり入みるに、まして、つかひにこたふるまでもなかりけり。

〔挿絵・第四図〕

かくて、としもくれ、春のころにもなりにけり。にうだう、いかゝおもはれけん、ぎわうかもとへ、つかひをつかはして、「いかに、そのゝち、何事がある。ほとけか、あまりにつれ／＼けなるに、まいりて、なくさめよかし」とのたまひければ、ぎわう、あまりの心うさに、返事を申にをよはず。

にうだう、かさねてのたまひけるは、「いかに、返事をはせぬぞ。さて、まいるましきか。まいるまじくは、すみやかに申せ。きゝりて、にうたうか、はからふむねあるへし」とぞ、おほせられける。

はゝのとち、申けるは、「なと、かほとにしかられまいらせんよりは、御返事をは申さぬぞ。みやこのうちにすむほとにては、ともかうも、にうだう殿のおほせをば、そむくましきにて

あるぞ」といへば、ぎわう、「まいらんとおもふ、みつからならばこそ、やかてまいるとも申さぬ。『めすにまいらずは、からふむねあり』とおほせらるゝは、みやこのうちをいたさるゝか、さらずは、いのちをうしなはるゝか。これ二には、よもすぎし。たとひ、みやこのうちをいたさるゝとも、いづくか、つゐのすみかなる。たとひ、いのちをめさるゝとも、又、おしかるへきわが身かは。一たび、うき物におもはれまいらせて、二たび、むかふへきにもあらず」とて、なを、へんたうにもよばす。

はゝのとち、申けるは、「おとこ、女の、えん、しゆくせは、いまにはしめぬ事ぞかし。ちとせをかけてちきれとも、やかて、わかるゝ中もあり。たゝかりそめとおもへとも、なからへはつゝる事もあり。たゝ世にさためなき物は、おとこ、女のならひなり。いはんや、わこせんたちは、あそひ物なり。一日、かたとき、めされたらんたにも、ありかたかるへし。いはんや、みとせまで、とりをかれまいらせたりつれば、こんじやうのおもひてには、いかでかあるへき。『めすにまいらぬ』とて、いのちをめさるゝまでは、よもあらし。みやこのうちをこそ、いたされんすらぬ。たとひ、みやこをいたさるゝとも、わこせんたちは、わかければ、いつくのうら、いは木のかけにても、すぐさん事はやすかるへし。わらはがとしおひ、おとろへたる身の、みやこのうちをたちいてゝ、ならはぬひのすまひこそ、かねておもふもかなしけれ。たゝわらはを、みやこのうちに、すみはてさせたまへ。それぞ、こんじやう、ごしやうの、けうやうとおもふへき」と、なみたませきあへす申ければ、ぎわう、

「此うへはまいるへし」とて、いてたちけり。
ひとりまいらんか物うければ、いもうとのぎ女をもぐしけり。
おなしやうなるしらひやうし、二人、ひとつくるまにとりのりて、にし八てうへそまいるける。

〔挿絵・第五回〕〔欠〕

きわう 下(題簽)

日ころ、めされしところより、はるかにさがりたるところに、さしきしてこそをかれけれ。「こは何事のどがぞや。さしきをさへ、さけられつる事の心うさよ。これにつけても、なにににまいりけん」とおもふにも、けしきを見へしと、をさふるそてのしたよりも、あまりてなみたそこほれける。

ほとけこせん、申けるは、「日ころ、めされぬところにてもさふらはず、たゝひとつところへめさるへし。さらすは、わらは、いてゝけんさんせん」と申けれとも、にうだう、「なんでもう」とて、ゆるされざりければ、ちからをよはず。

やゝありて、にうだう、いてあひたまひて、「いかに、ぎわう、そのうち、何事かありし。ほとけがつけくけなるに、いまやうひとつ、うたひて、なくさめよかし」とのたまへば、ぎわう、「まいるほとにては、ともかうも、おほせのまゝにこそ」とおもひければ、いまやう一ぞうたひける。

「ほとけも、むかしはほんぶなり。われらも、おもへばほとけなり。いつれも、ぶつしやうぐせる身を、へたつるのみこそをろかなれ」と、二三へん、うたひすましたりければ、みな人、かんるひをもよほしけり。

〔挿絵・第六図〕

にうたうも、「しんへうに申たり」とおほしめし、「やかて、まひをもみるべけれど、いさゝか、まきるゝ事あり。このゝちは、めさすとも、つねにまいりて、まひをもまひ、いまやうをもうたひて、ほとけ、なくさめよ。さらは、とうく、かへれ」とそ、のたまひける。

ぎわう、わかもとにかへりつゝ、きぬひきかづき、なきふしたり。「おやのめいをそむかじと、二たびうきみちにおもむきて、けふは、さしきをさへ、さけられつる事の、心うさよ。なをも、うき世にあるならば、かさねて、うき事をこそ見んずらめ。されば、ひの中、みつのそこへも、入なばや」とそ、かなしみける。いもうとのぎ女も、「あね、身をなけば、われもともに」とそ申ける。

はゝ、申けるは、「かくまで、なさけなくおはすへしとは、つゆもおもひよらすして、とかく、けうくんしてまいらせつる事こそくやしけれ。うらむるも、まことにこはりなり。あね、身をなけば、いもうとも、ともになけんといふ。ふたりのむすめにをくれて、われ一人、のこりとゝまりたらば、いかはかりの事かはあるへき。ともに、身をそなけんずらめ。たゝし、じごもきたらぬおやに、身をなげさせん事、五ぎやくざいにてあらんすらん。みたによらひは、さいはうじやとをしやうこんし、一ねん十ねんをもきはらず、十あく五きやくをもみちひかんといふ、ひくわんましますなり。四十八のせいくわんの中に、たいてい三十五のくわんには、われらがやうなる、くちあんどんの物を、みちひかんとひぐわん、ましますなり。かのくわんりき

にすかりて、さいはうのじやうと、ふたいのほうとへまいらんとは、おもはずや」といひければ、ぎわう、「まことに、しごも、きたらぬおやをうしなはん事、五きやくさい、うたかひあるまし」とて、身をなけん事をば、おもひとゝまりぬ。とし二十一にて、さまをかへにけり。

いもうとのぎ女も、「あね、身をなけば、われもともにこそちきりしが、うき世をいとはんにも、たれかおとるへき」とて、十九にて、おなしく身をそやつしける。

はゝのどち、「二人のむすめの、わかくさかりなるたにも、さまをかへぬるよの中に、わか身、おしからぬしらがをつけても、何かはせん」とて、とし四十五にて、かみをそり、三人、さかのおくなる山さとに、ねんふつしてこそいたりけれ。

〔挿絵・第七図〕

かくて、春すぎ、なつたけぬ。秋のはつ風ふきぬれば、ほしあひのそらをなかめつゝ、あまのとわたるかちのはに、おもふ事、かくころなれや。物をおもはさらん人たにも、つゆけき秋のゆふへは、かなしかるへし。いはんや、おもひある人の心のうち、をしはかられてあはれなり。

にしこの山のはに、かたふく日を見ては、「あれこそ、さいはうのじやうとにてあるなれ。いつかわれらか、かのところにむまれて、物をおもはでござん」と、ねかふにつけても、むかしのこのみわすれねは、つきせぬ物はなみたなり。

日もすてにくれければ、ふつせんに花かうそなへ、ともしびかすかにかゝつゝ、三人のあまとも、一しよにさしつとひて、ねんふつしけるところに、とぢふさきたるたけのあみとを、たゝ

くをとのしければ、あまとも、ねんふつをとゝめて、「ひるたにも、人もかよはぬかくれがに、たゝいま、とひくへしとこそおほえね。あはれ、これは、われらがかやうにおこなひてあるを、さまたげんとて、まゑんなどのきたれるにこそ。たゝし、まゑんならば、これほどのたけのあみとをは、をしあけていらん事は、やすかるへし。たゝ、すこやかにあけていれんに、たすけばしかるへし。たとひ、いのちをうしなふとも、日ころ、たのみたてまつるねんふつ、あひかまへて、おこたるなよ」と、たかひの心をいまして、てをとりにくみ、とじたるあみとを、おもひきりて、あけたれば、まゑんにてはなかりけり、ほとけこそんぞいてきたる。

きわう、「あなふしきや。ひるたにも、人もとひこぬしづのいほりに、たゝいま、なにとして、きたりたまへるぞ」といへば、ほとけ、「いまさら申は、事あたらしきになりにたり、申さねば、又、おもひしらぬにも、なりぬべければ、申なり。わらはゝ、もとより、すいさんの物とて、すけなふいはれたてまつりて、まかりいてしを、わこせんの申されてこそ、めされまいらせてさふらひしに、おもひのほかに、めしをかれまいらせて、わこせんを、いたされたまひし心うさ、申はかりもさふらはす。いつか又、わか身のうへにてあらむすらんと、おもひしに、あはせて、しやうじに、『いづれか秋にあはではつべき』と、かきをきたまひしふのあと、おもひやられてこそさふらひし。又、いつそや、めされまいらせて、いまやうたひたまひしとき、さしきをさへ、さけられたまひし心うさ、申いたすものをろかなり。そのゝち、いつくにとも、うけたまはらさりしが、此ほと、

きゝいたしまいらせ、うら山しきことゝおもひ、しきりにいとまを申せとも、にうだう、御もちひまします。つくく、物をあんするに、しやはのゑいぐわはゆめのゆめ、たのしみさかへてもなにかせん。にんじんはうけかたく、ふつけうにはあひがたし。いつるいきの入をまたす。かけるふ、いなつまよりもなをはかなし。かやうの事をおもふに、いとゝ心もとゝまらで、此ひる、ひまのありつるあひだ、にけいてゝ、かくなりてこそまいりたれ」とて、かつきたるきぬを、うちのけたるをみれば、花やかなりし、ゑいくわのたもとをひかへて、あまになりてぞいてきたる。

「日ころのとがをば、これにゆるしたまへ。ゆるさじとのたまはゝ、これよりいつかたへも、あしにまかせてまよひゆき、いかならんいはのかと、まつがねに、たふれふすまでも、ねんふつして、みた三ぞんのらいかうに、あつからん」と、なみたもせきあへす申ければ、

〔挿絵・第八回〕

きわう、「あないとをし、心のそのいきさよさよ。かくおもひたまふとは、いかてか、つゆはかりもしるへき。なに事も、うき世のなかのさかなれば、わか身のうき事をのみおもふへきに、ともすれば、わこせんのことのみわすれず、かた心にかゝりて、こんじやうも、ごしやうも、ともにしそんしぬるとおほえて、はれやるかたもなかりつるに、わこせんは、おもふ事もおはせず、としも、いまた十七になりたまふとこそきくに、ゑどをいとひ、しやうとをねかふへしとおもひ入たまふこそ、まことの大だうしんにておはしける。わらわか、かやうにさまを

かへしをこそ、人もありかたき事に申、身なからも、ふしきにおもひしに、わこせんのしゆつけにくらふれば、事のかすにもあらざりけり。曰ころのうらみは、なにしに、つゆはかりものこるへき。いさや、おなし心におこなはん」とて、四人、一つあんじちにねんふつして、たかひに、わうじやうをいのりけるに、ちそくのふとうこそ、ありけれども、ついに、わうじやうのそくわいをとけるとぞ、うけたまはる。

〔挿絵・第九図〕

にうたう、ほとけをうしなひて、てにてをわけて、たつねさせられけれども、なかりけり。しやうかい、「これは、あまりにみめよかりつれば、てんくかとりたるにこそ」とそのたまひける。

そのゝち、やゝありて、きゝいたされけれども、「さやうになりたらん物をば」とて、たつねられさりけり。されば、こしら川のほうわうの、ちやうかうたうのくわこちやうにも、きわう、き女、ほとけ、とぢらかそんれいと、入られけるとぞうけたまはる。あはれなりし事ともなり。

(いしかわ とおる)